

公益と私

—どのように公益を意識し、関わってきたか—

川口 善行

おそらく多くの人々と同様に、私も日常生活に於いて、ある時期までは公益を意識することはあまりなく生きてきた。ある時期とは、NGO（国際協力市民組織）と関わるようになってからである。と言っても、その時から公益という言葉を強く意識して生きてきたと言うのではなく、後から考えてみれば、あの頃からは、私なりの理解による公益を意識することが多くなったという程度の意味である。現在でも、公益という「ことば」自体、世間の日常会話には殆ど登場しない。誰かに「公益」とは

何かと尋ねれば、「社会一般の利益」「公共の利益」というような説明がなされるだろう。さらに具体的に尋ねてみれば、その意味するところは人それぞれであることに気付くだろう。公益という言葉を定義することが本文の目的ではないが、もう少しだけ続けたい。公益の反対は何かと考えてみると。私利私欲、公害という言葉が思い浮かぶ。それらが存在しない状態が、公益に適用すると割り切れる程、ことは簡単ではない。公益の意味するところを簡潔に説明することは難しい。本人が公益を意

識する、しないにかかわらず、人は皆、公益と無関係に生きることはできないと思われる。そこで、私がこれまで、どのようなときに、どのように、公益を意識し、それに関わってきたのかを振り返ってみたい。

一 まず大学進学するとき

高校までは自分の学ぶことを選択できる立場ではなく、ただ与えられるものを勉強するか、あるいはさぼるだけのことだった。しかし、大学へ進もうとする時には、何を学ぶかを考えざるを得ない。それは将来自分がどの様に生きていくかにつながる。しかし周りの友人たちを見ても、医者になりたいから医学部、文学が好きだから文学部、などの目標がある者も、わずかながらいたものの、大半は経済でも法律でもどれでもよいから、とりあえず大学生になろうという程度のことだった様な気がする。私自身は各学部の内容も良く判らないままに、たまたま読んだ経済に関する本に多少興味を覚えたからといえば、

まともに聞こえるかもしれないが、実は親が、「特に決った目標を持たず、卒業したら普通に企業に就職するのなら経済学部が良いだろう」と、うるさく言うので「まあ、いいか」と、それに従ったと言う方が事実に近い。つまりその時には、公益に対する意識はなかった。学部の選択は、興味を持ってそうな学問かどうか、あるいは就職の際に有利かどうか等の、個人的な関心か、あるいは利己的な選択に過ぎなかった。

二 学生時代、そして就職のとき

学生時代に懸命に学んでいても、遊んでばかりでも、入学して四年経つと卒業し、働かねばならない時がやって来る。当時も入学時の一二年の浪人は珍しくなかったが、現在の様に入学後、留年という体裁のよい呼び名の下で一二年よけいに在籍する学生は少なかった。いとすれば落第生と呼ばれ、いささか肩身の狭い存在だった。

私自身も勤勉な学生だったと胸を張っては言えないが、それでも所属した社会思想史のゼミナルでは、今でも心に残る、教授と学生たちのやりとりがある。ある日学生たちは「社会主義の根本的な思想は何か」と尋ねられ、それぞれ生半可な知識を並べた。すなわち、唯物史観、弁証法、労働価値説、人民主権説、生産手段の社会化等々、学生が思い思いに何か述べると、教授からさらに質問されるのだが、なかなかうまく答えられず閉口してあきらめかけた頃、次の様な言葉が教授の口から発せられた。「どれも重要なことではあるが、根本は何かと言え、産業革命以後の労働者や農民の始めな生活を

目のあたりにした人々が、何とか彼らを救いたいと考えたことが社会主義の根本ではないかな。」なるほど、一つの原理原則が社会思想を生むのではなく、人々の思いが理論に裏打ちされて社会思想になるのだと感じた。このようなできごとを通じて、いかに生きるべきかを考えることもあったが、多くの時はテニスの同好会を中心に、スポーツ、音楽、読書、映画、たまのデートなどに過ごしている間に、時は流れて行つた。四年生になつても卒

業後は何をしたらよいのか判らない。自分が本当に好きなことは何なのかも判らない。これらの点は現在の学生諸君と大きな違いはないだろう。

私が学生時代を過ごした六〇年代半ばには、四年生の七月一日が解禁日と呼ばれ、所謂、大企業ないし有名企業は同日一斉に採用試験をしていた。その頃になつてあせつても遅いのだが、それでも自分のやりたいことは何なのかと懸命に考えた。当時は特別の事情がなければ、卒業予定者は「どこか良いところに就職したい」という極めて漠然とした気持ちで就職先を搜していたように記憶している。運良く良いところに、あるいは多少不満があるうとも何処かに就職できたならば、入社後は簡単に転職は難しい社会情勢であつた。どこに就職するかによつて、一生の運命が決つてしまうような気がして、非常に悩んだものだった。となれば少しでも自分の性格、体質に合った就職先を求めるのは自然だ。ところが肝心の自分のやりたいことすら判らないのだから、悩まざるを得ない。大人の社会のことは殆ど知らない状態で、漠然と「困っている人の役に立ちたい、営利企業は所詮金も

うけなので気が進まない」などと考えてみても、当時の自分に何ができるのかが判らない。二五年後に関わることになるNGO（国際協力市民組織）のことなどは誰も知らず、現在は世界一の規模を誇るODA（公的開発援助）の実施機関であるJICA（国際協力事業団）も、当時はまだ発足していなかった。そこで思いついたのは、決定を少しでも先伸ばしするために、学生生活の延長である。ところが当時は大学院に行く学生は、将来研究者か教員になる覚悟で一年の時から良く勉強していた。私のように一時逃れのための学生を受け入れてくれるようなところはありそうになかった。それでは他の大学に学士入学するか、海外に留学することを考えた。あちこちの学校案内を手に入れてはみたが、何かを本当に勉強したい訳ではないので、国内ではこれまでの学生生活の繰り返しになりそうだった。海外ならば人生が変わるような気がするのだが、当時はまだ一ドルが三六〇円の時代である。アメリカ往復の航空券代、学費や生活費を考えると、親が資産家である上によほど子どもに甘くなければ私費留学は珍しかった。私の親はそのどちらでもなか

った。それならフルブライト等の奨学金を得ればよいのだが、怠けてきた私が厳しい留学生試験に通る筈がない。つまるところ、私のような平凡な学生は贅沢を言わずに就職すべきなのだと、学生生活の延長は諦め、私を採用してくれるという、太っ腹な損害保険会社のお世話になることにした。本人は嬉しさ半分とは言え、親はこれ息子の子生活は一生安心と思っただけ、大変喜んでくれた。少々遅ればせながら損害保険の説明を読むと、これがなかなか良くできた仕組みのようである。多くの人々から集めた保険料を、運悪く事故にあった人に支払ってその経済的損失を補填する保険会社は、社会にとって必要なものであると同時に、企業活動としても有望なものだと、納得してしまった。就職は生活の為、金の為と開き直るのではなく、営利企業で働いても、やり方次第で社会のためになると信じることにしたのである。

三 会社員生活

いざ入社してしまえば、毎日、仕事に慣れるのに精一杯であり、少し慣れてくれば、今度は仕事に追われる毎日だった。そうこうするうちに、結婚し、子どもが生まれ、何時の間にか幼稚園へ行っていた。ある日父親参観日ということで、幼稚園に行くと、先生が子どもたち一人一人に、お父様のお仕事を教えて下さいと尋ねていた。自分の子どもが何と答えるかと固唾を飲んでいたら、我が子は「うちのお父さんの仕事は、火事や交通事故にあつて困っている人にお金をあげることです」と言ってくれたのだ。何と美しい仕事であることか、しかもそれは嘘ではない。但し、その美しい仕事の前に、困っている人々にあげるお金を集めるために厳しい競争に耐えねばならない。その後しばらくは、仕事に疲れた時には、我が子が言ってくれた、「お父さんの仕事」を思い出している、自分は社会の役に立つ仕事をさせてもらっているのだと思うことにした。会社員であれ、自営業であれ、仕事となれば、楽しいこともあれば、厳しく辛いこともある。

るのは当然だ。自分の経験に限って言えば、会社として新しい仕事を始める際に新設された部署に配属されたことが五回もあり、同僚と比べて面白い仕事に恵まれた方だと思う。自分なりに一生懸命働いたつもりである。在職中は仕事が楽だとは思わなかったが、待遇は他の職種で頑張っている方々と比べてもよかったのではないかと思う。日本経済の拡大と共に年々給与も増え、自分と家族の生活も少しずつ向上していることも実感できた。

四 中途退職

仕事にさしたる不満も無かったにもかかわらず、ある朝のできごとがきっかけで、「たつた一度の人生、このまま同じ仕事を続けていて、本当に満足できるのか」と、出口の見えない難問を考え始めてしまった。別に大した事件があつたのではなく、むしろ当たり前のことなのだが、本人にとっては大事件だった。四三歳のある朝、多くのサラリーマンがしているように、その日も通勤電

車の中で新聞を読んでいた。ところが、その日は字がぼやけてよく見えない。目を凝らしたり、新聞を近づけてみても、やはりよく見えない。このところ飲み過ぎで疲れているのかな、などと考えながら、ふと新聞を遠ざけるとよく見えるではないか。いよいよ老眼である。子どもの時から目が良く眼鏡を掛ける必要が無かった私にとつては、大事件であつた。大げさかもしれないが、まだまだ元氣だと思つていたのに、既に老化が始まつているのだと思うと、居ても立つてもいられない気持ちになつてしまつた。それから自問自答が続いた。「一度だけの人生、このまま続けていいのか。本当に満足しているのか。後で思い残すことはないのか。」もちろん簡単に答えが出る筈がない。妻と三人の子持ちの中年男にとつて、安定した収入とそこそこの世間体は無視できるものではない。営利企業が、製品やサービスを社会に提供して利潤を得ることや、そこで働く者が収入を得ることが、間違つたこととは思わない。それらの行為は社会に必要なことであることも理解している。自問自答を続けているうちに、次第に自分が何かもつと直接社会に役立

つことをしてみたい、それも営利を目的とせずにやつてみたくなつていることに気付いた。そうしたことは定年後でも遅くはない。どうしても今やりたければ、休日や時間外にボランティアとしてすべきかもしれない。しかし、私としては、老化が進む前の元氣なうちに、新しい仕事に全力投球したい。意欲はあつても迷い続けるだけで計画は立たない。親しい先輩、友人たちに相談すれば皆、「家族もあるのだから先の計画をきちんと立てることが先だ、退職するかどうかはその後のことだ」と助言してくれた。しかし、多くのサラリーマンもそうだと思うが、社内外の競争は厳しく、毎日仕事に追われ、遅れずについて行くだけでも大変なことである。きちんと計画を立ててから実行しようとすれば、定年の方が先にきてしまう。幸い社宅住まいでなく持ち家に住んでおり、折からのバブルのお陰で勤務先の自社株の持ち株会に毎月積立していたものを売却すれば、退職金を加えて、当面の生活費と、三人の子どもたちの学費は確保できる見込みが立つた。そこで、とにかく退職して自由な時間を得てから、その後の計画を立てることにした。

五 仕事探しとNGOとの出会い

こうして自由な身になったとはいえ、すぐに計画が立つ筈もなく、仕事上知己を得た方、個人的な先輩、友人等、多くの方々のご意見ご助言を頂きつつ、少しずつ勉強を始めた。二三年間にわたり所謂大企業のサラリーマンをしていた者にとって、所属のない状態は、気分の落ち着かない頼りないものだった。具体的な計画とは言えないが、前職で海外駐在を含めて、国際分野の仕事に携わったことも影響したのか、できれば国際協力、国際交流などの非営利活動に興味を持った。後にスタッフとなるNGO（国際協力市民組織）を、始めから目指していたものではなく、そのような分野で働くことができるのなら、ODA（政府開発援助）関係や、国際機関等でも特にこだわりはなかった。また営利企業であっても実質的に社会のためになるのであれば、それも良いと考えていた。多くの方々のお話を伺っていると、大企業の間管理職であった自分には、様々な面で経験、知識共に足りないことを感じていたところに、ある方から「中年

過ぎての職探しの場合には、とりわけ民間、公的機関を問わず国際的な組織は資格、学歴を重視するので、思いついて留学して修士号でもとってきたらどうですか」と助言を頂いた。いままら自分にできるかどうか不安ではあったが、思い切って、学部卒業時には果たせなかった米国留学を試みることにした。米国のビジネススクールでの生活は、予想どおり勉強漬けの厳しい毎日であったが、何とか修士号を得て帰国することができた。以前に企業の駐在員としてブラジルに派遣されていた時にも感じたことだが、留学中にも、外国人のものの感じ方、考え方は、日本人の常識とは大分異なっていることを再認識させられた。日本では家族のある中年男が会社をやめた場合は、好奇の目で見られ、善意の心配もあれば、様々な憶測もある。それらの疑問に対し、納得のいくような説明をすることは殆ど不可能であった。米国でも時には、何で会社をやめて勉強しているのかと尋ねられることはあったが、「今までと違うことをしてみたいのでその準備です」と答えれば、殆どの人はそれで納得してくれた。留学中親しくなった、南米の途上国からきた

働くことになる「シャプラニール」市民による海外協力の会」だった。

六 N G Oで働く

友人に、彼の母国では外国からの援助を受けて経済インフラを整備しているが、雇用機会が殆ど無く、大部分の住民は貧しい。雇用を増やすような事業を一緒にやらないかと誘われ、興味を持った。帰国後、商社、銀行、製造業等の様々な分野で活躍している先輩、友人に相談し、国内でできる調査を行い、現地でも調査を行い、交渉を進めた。結果としては実現しなかったとはいえ、わくわくするような楽しい作業だった。当時は湾岸戦争のさなかで、罹災者の支援および油濁による海洋汚染を防ぐ目的で一時的にできたN G O 連絡網の手伝いをしないかと誘われた。それまでN G O については活字を通じて得た知識しか持たなかったので、良い機会だと思い、二週間だけお手伝いすることにした。連日集まってくるN G O 関係者は、良い意味でも悪い意味でも私がそれまで生きていた世界の人々とは違っていた。私にとって刺激的な経験だった。そこで知り合った、あるN G O の代表から「時間があるなら我々の団体の組織強化を手伝ってくれないか」と誘われた。その時はボランティア活動の誘いだったのだが、この団体が後に私が専従スタッフとして

当初は南米における事業と並行して出来ないかと考えていたのだが、南米は遠く、簡単に往復できる距離ではない。現地に良い代理人が見つからない限り、準備段階から自ら出掛けて行かなければ話が進まないことが判り、事業開始後も困難が予想された。一方シャプラニールに関わり始め、バン格拉デシュにおける活動現場も直接見てきたところ、大変意義のあるものだと感じた。事務局にも出入りするようになると、これは片手間で出来るような仕事とは思えなくなり、一九九一年、思いきってフルタイムのスタッフとして参加することにした。

シャプラニールは、独立後間もないバン格拉デシュに一九七二年、日本製耕運機の運転指導のボランティアとして派遣された二〇代前半の若者たちの中の有志が、帰

国後も継続的な支援を目指して設立したNGOである。行政も、企業も、宗教団体も一切の後ろ盾なしに二〇年近く一貫して、バングラデシュの土地なし農民と呼ばれる農村の最貧困層住民の自立と生活向上に協力してきた。具体的には成人のための識字学級、トイレと井戸の普及と保健衛生意識の向上、収入向上のための技術研修と小口無担保ローンの提供など多岐にわたる活動を実施していた。日本から派遣している駐在員は一名のみだが、現地人スタッフは五〇名を超えていた。このような活動に参加出来るとは私にとって喜びだった。当時は事務局長を含め、代表、常任運営委員など、会の運営を担う中心的な人々はすべて無報酬のボランティアで、他に職を持っていた。決算書類等からみても、営利企業並みの給与は出せないことは承知しており、収入が二、三割減となることは覚悟していたが、実際には半分以上になってしまった時には複雑な心境を味わった。私自身はそれなりに準備していたので、すぐに生活に困ることはなかったが、これではNGOは特殊な世界になってしまうと感じた。事実それまで属していた世界とは異なる考え方や仕

事の進め方を幾つも発見した。とはいえ、仕事そのものは面白く、やりがいのあるものだった。それらにも次第に慣れ、周囲もまた私の考えや手法を受け入れてくれるようになり、翌年事務局長に選任された。その後一九九八年に二期六年の任期満了を機に後任者に席を譲るまで、忙しく充実した毎日だった。営利企業も非営利組織も、そこで勤務し給与を得ている限り、全力を尽くさなければならぬことに変わりはない。働くことによって得られる充実感には、両者に共通点もあるが、NGOで働いた七年余りの間には、前職における面白さとは少々異なるものを経験することができた。多くのNGOでは、有給の専従スタッフと無給のボランティアが一緒に仕事をしている。どこのNGOでも有給スタッフはまだ限られた人数であるが、彼らはNGOの活動が本職であり常に工夫し努力することが求められている。一方ボランティアは普通は他に本職を持ち、NGO活動に割ける時間に限度があるばかりか、それも人によりまちまちである。NGOに対する思い入れや求めるものも様々である。また専従スタッフとボランティアの関係は、正社員とパート

タイマーの関係とは異なり、専従スタッフが上位に立ち、指揮権があるということではない。このような関係の両者が共に活動することは必ずしも易しいことではない。しかし両者の特長が巧く機能して協力できれば、思いがけないほど大きな力を発揮する。NGOで働くことの喜びが何であるかは一口では言い難いので他の機会に譲ることとしたい。

NGOの事務局長を退いた後は、それまで兼務していた、NGO活動推進センター（個別のNGOの活動を超えてNGO全体の活動環境の改善を目的とするNGO）、ボランティア市民活動センター（NGOに限らずボランティア活動を推進するNPO）、ならびに従来から関わっていた二つのNGO等の役員を非常勤で務めた。その他に二つの大学で福祉やボランティアに関する講義を持つ機会を得た。そこでは公益とは何かと考える機会が増えた。

七 公益ならびに公益学と

今後どのように付き合っていくか

公益も公益学も、その意味するところはまだ定義されていない。多種多様な行動が公益に関わっており、学問としては今まさに出発するところである。対象とする領域は、制限されることなく幅広い分野が関係するものと思われる。私が最近一〇年間関わってきたNGOの活動を公益にかかわるものとして、例に挙げてみる。ある途上国の貧しい住民の生活向上を活動の目的とする。単にモノ、金を与えるだけでは、与える側の自己満足になっても、受ける側にとっては、他者への依存心が高まるだけで何の解決にもならないことは、多くの人が既に理解している。それでは住民が自分の力で収入を増やすために、技術指導を行おうとすると、読み書きを始めとする基礎学力の欠如に気づく。そこで基礎教育の普及から始めようとする、学力以前の栄養失調その他の基礎的な保健衛生環境が劣悪であることに気づく。それらは、住民が好んで選んだものではなく劣悪な経済状態、教育環

境、さらにつけ加えればその土地の慣習、宗教、政治等、その他様々な要因が相互に作用している。やらねばならないことは、次々と広がっていき、どうしてよいのか判らなくなってしまう程である。とはいえ、悩むだけで手をこまねいていても仕方がない。可能な限り総合的なプログラムを実行したいのだが、人材、資金、時間等の制約があり、一度に全てに手をつけることは不可能である。そこで、緊急性の高いこと、いま出来ることの中から生活の向上に効果的と思われることを選択して手をつけることになる。仮に基礎教育として、識字教育の実施を選んだとすると、その分野における専門的な知識と経験の有無によって成果は違ってくる。住民の状態によって、手法を選ぶことができれば、成果は大きくなるだろう。支援する側の実施しようとする分野における専門能力および、それを活用する情熱が求められる。それにも増して大切なのは支援を受ける側の必要性の認識に基づくやる気である。そうなると、識字教育に関する狭い意味での知識と経験を超えて、住民のやる気を引き出す能力が求められることになる。場合によっては、急がずに、機

が熟するのを待つのも大切なことである。問題をNGOの識字教育の実践からスタートしても、我々が学ぶべきこと、研究することは、いくらでもある。視点を少し大きくして途上国開発協力について考えると、それが単に途上国に於ける経済問題だけでなく、世界規模の経済、政治に繋がっていること、さらに我々自身の問題を含めた、環境、人権、文化等々、あらゆることに広がっていくことに気づく。

学問としての公益学を考えると、経済学、政治学、社会学、倫理学、宗教学等々の社会科学から、物理学、化学、工学、医学、等々の自然科学から科学技術、と挙げていけばきりがない。公益とそれを学ぶ公益学は、どこまで広げて行けばよいのか判らない程、あらゆる行動と学問に関わりがあることに思い知らされる。どこかで線を引かなければ、専門性は深まらないことが事実であると共に、それらの相互関係を無視しては公益は学べない。専門化と統合化、相互の矛盾の種は尽きない。これらを深刻に悩むだけではなく、面白がるような心の余裕を持っていたい。私がこれまで関わってきた、そしてこれか

らも関わっていくことになるであろう途上国開発協力論、非営利組織経営論、ボランティア論等についても、その時々状況により範囲を定め、仮説を立てながら、専門性を高めていかなければならないだろう。それと同時に他の分野との相互作用、できれば相乗効果を高められるような教育、研究ができればよいと、現在は考えている。さらに希望していることは、教育と研究にとどまらず、実践に関わることにより、学生諸君と共に学んだことが活かされることである。